届け 世界の果てまでも

令和４年１０月１８日　Ｎｏ．４０　文責　校長　飯久保一男

大人の基準と子どもの基準

ほめることは，自尊感情を育て，自己肯定感を高めることにつながります。前号で書いた「のび」を認めることも大変有効です。ほめられることで，もっとがんばろう，次もがんばろうという子どもの意欲につながります。そして，子どもによっては，成長するにつれ，ほめられたいという感情よりも，認められたいという感情の方が大きくなる場合があります。さらに，ほめ方によってはうれしくないという感情も生まれてきます。

大人が子どもをほめるときは，多くの場面で「大人の基準」でほめています。子どもの行動やその結果などが大人の基準に達したとき，子どもをほめることが多いのです。そういうほめ方は，大人の基準に達しないと「もっとがんばれ」となってしまいます。大人のレベルで物事を考えて，それに到達したかどうかの判断をしてしまうのです。上から目線の判断であり，子どもを下に見ています。

これに対し，子どもが自分を認めてほしいと思う内容は「子どもの基準」になります。中・高学年くらいになると，周りと自分を比較して考えますので，「みんなと比べるとレベルは低いと思う。でも，自分としてはよくやった」という自己評価をもつことがあります。こんなとき，ほめられてもあまりうれしくありません。ほめられたいというよりも，「のび」やがんばりや努力を認めてほしいと思っています。また，自分はそれほどがんばっていないのに，「みんなよくがんばった」と全体をまとめてほめられても，うれしくないものです。

表面的な，お世辞のような言い方でほめても，自尊感情は育ちませんし，自己肯定感は高まりません。

…令和２年度の校長通信 No.１２「子どもをほめること」の一部を再掲します。

いい加減な掃除をしている高学年の子どもたちに「すごいねぇ，さすが高学年生だねぇ。がんばってるね。」と教師が声をかけたとします。この教師を子どもたちはどう思うでしょう。高学年の子どもたちは，大人の心を読むことには敏感です。口先だけでほめても，腹の内は見透かしています。「いい加減な掃除をしているのにほめられた？」この人は自分たちのことがよく分かっていない人なんだと思ってしまいます。「もしかして皮肉を言われているの？」などと勘ぐってしまうことにもなります。

…令和２年度の校長通信 No.６４「何をほめたらいいのか…」の一部も再掲します。

子どもに家の仕事（お手伝い）を任せたら，その努力に対して，Ｉメッセージにして「がんばってくれてうれしい」と伝えると，満足感や達成感は大きいものとなり，自己肯定感も高まります。次も張り切ってやったり，他の仕事も進んで受け持ったりするのではないかと思います。学習にしても，運動にしても，能力をほめるよりも，努力をほめるほうが，次もがんばろう，次のステップへ進もうとする力となるようです。努力したことにより，結果につながると，満足感や達成感，そして自己肯定感はより大きなものになります

どちらかというと，ほめるときは結果をほめることが多く，認めるときは「のび」や努力を認めることが多いのではないかと思います。子どもの年齢や発達段階，そのときどきの子どもの状況にもよりますが，できたことをほめることより，「のび」や努力などを認める方がいい場合が多くあります。

６年生の算数「分数のかけ算・わり算」の学習は，

①分数のかけ算の学習→②分数のかけ算のテスト→③分数のわり算の学習→④分数のわり算のテスト

と授業を進めていきます。②分数のかけ算のテストの結果は１００点でした。この②の時点で「すごいじゃん。」「かしこくなったね。」と親がその子をほめたとします。しかし，④分数のわり算のテストの結果は７０点でした。さて，何と言ってほめたらいいでしょう。②の１００点をほめられ，喜ぶ親の姿を見た子どもの中には，親にとっての理想の子でいたい，よくない結果を責められるのがイヤ，ダメな子どもだと思われたくないなどの理由から，④の７０点のテストを隠したり，テストはまだ返してもらっていないなどと嘘をついたりすることにつながってしまうこともあります。

そこで，結果をほめるよりも，努力の過程などを認めることをオススメします。

②分数のかけ算の１００点のテストを見て

「授業でやった問題を自主学習でもう一度やるという目標で取り組んだことがよかったんだね。」

④分数のわり算のテストの７０点に対しては，

「難しいって言っていた問題をたくさん練習したから解けるようになったじゃん。」

などと，学習の過程を認めることで，大人の基準ではなく，子どもの基準で認めることになります。でも…，このためには，子どもの（家庭での）学習の様子を知っていなければなりません。「そんなにいつも子どもの学習を見ていられる暇がない」という声が聞こえてきそうです。ごもっともです。

その解決方法の一つとしてこんなことが考えられます。

子どもに（家庭）学習の目標を立てさせ，それを知っておく → 目標の到達度を認める。

子どもが家庭学習（自主学習）の目標を「授業でやった計算を家でもう一度やる」とつくったとき，その目標を親にも伝えるようにしておきます。前述のように，テストの結果を見たとき，その目標が達成できたことを認めてやることが，子ども基準で認めることになります。また，目標への達成度を子どもに聞くことも一つの方法です。子どもの自己評価や自己分析を聞いて，それを認めてやることも，子ども基準で認めることになります。さらに，目標づくりを一緒に考えられるようでしたら，親子でのステキな時間となると思います。

ほめられてうれしくない子どもはいないから，とりあえずほめておけばいいだろうということでは，ほめているように見えて，大人の基準で子どもを下に見ていることになってしまいます。学習を含むその他の場面などで，子どものこだわっている部分や見てほしい部分を理解することは，子どもを理解することの一つです。

「できた・できない」という結果ばかりを大人の基準でほめたり認めたりしていると，「できないと認めてもらえない」「できない自分には価値がない」という意識をもたせてしまう可能性があります。「できなければ親から愛してもらえない」と考えてしまうことは危険なことです。ほめられなければ何もやらなくなったり，人が見ているときだけがんばったり，というようなゆがみにつながってしまうこともあります。

最後に，紙面の都合で一つだけになりますが，子どもをほめる・認める方法を紹介します。**間接的にほめる（認める）**という方法です。日本は，世界の中で夫婦の会話の時間が少ない国だそうです。我が家もご多分に洩れませんけど…。その少ない夫婦の会話を増やし，しかも子どもをほめることができる一石二鳥の方法です。子どもと一緒の夕食のときなどに「今日はこんなことしてくれた」「今日はお手伝いをしてくれて，とてもうれしかった」と，子どもの話を夫婦の会話の切り口とすることです。その会話を近くで聞いている子どもは，自分のことを認められていると感じますし，自己肯定感も高まります。

むむっ，我が家は現在，息子２人と一緒に住んでいません。この方法では私と妻の会話は…，増えません。